

『氷室』2019年3月号掲載用

季語つれづれ 番外(四九) 三春

尾池和夫

【春の大三角】 春の大曲線

春の夜空に星が少ないのは、銀河面に対して垂直の方向を見ているからで、明るい星が少ないので宇宙の彼方を見通すことができる。おとめ座の白い点が天の川銀河の中にある星で、それ以外は宇宙の彼方の銀河を見ている。

北斗七星は、ほぼ一年中見えている。北斗七星のしつぽから二番目の星は、肉眼二重星「ミザール」で、昔は視力測定に使われた。

春の空で目につくのが、おおぐま座から伸びる「春の大曲線」で、おおぐま座の北斗七星、明るいアルクトウルス、おとめ座の一等星のスピカを結んだ大きな曲線である。スピカとはラテン語で穂先のこと、女神デーメーテルが持った麦の穂先である。アルクトウルスとスピカから、しし座のデネボラをむすぶと「春の大三角」の形ができる。デネボラはアラビア語でししの尾という意味であり、他の二つよりも暗い二等星である。

スピカは青白く見えるが、実態は表面が二万度以上ある星で、接近して四日周期で公転する連星であり、赤道付近で秒速二〇〇キロで自転する。本体は楕円形である。アークトゥルスはギリシャ語で熊の番人で、おおぐま座の後ろにつく。ひとときわかるい〇等星であり、大きな固有運動の星で移動が激しい。五万年ほどでスピカの隣に来ると言われる。

『氷室』2019年4月号掲載用

季語つれづれ 番外(五〇) 晩春

尾池和夫

【菱餅】 雛の餅 菱形餅

雛祭の菱餅は下から、白、緑、赤であるという説では、雪が解けて草が萌え花が咲くという。白や緑だけで三段重ねにしたり、白緑白と交互に三段重ねの菱餅もある。地域によっては二色であったり、五色や七色の餅を菱形に切って重ねて作るものもある。また、赤、緑、白の順で、赤には魔除け、白には清浄、緑には健康長寿の意を重ねることもある。赤は、先祖を尊び、厄を祓い、解毒作用のある山梔子の実で赤味を付けて健康を祝う。菱の実を入れて血圧低下の効果を得るというものもある。緑は、母子草の草餅であったが、増血効果がある蓬の新芽で穢れを祓い、萌える若草を喩える。菱餅は、最近はおっぱら雛祭りに用いられるが、菱餅の起源にはさまざまなものがあり、正月のひし花びらが上巳の節句と結びついたという説、繁殖力の強い菱を食べ、成長を願うという説などがある。

菱台は菱餅を乗せるため、猫足型菱台や箱形のものがあり、盆は多くが菱形となっている。静岡県には三角形のものがあり、三重県にも三角餅がある。

「雛祭」は仲春の季語として扱われるが、江戸時代までは太陰太陽暦の三月三日だった。明治以後、太陽暦が一般的になったが、旧暦三月三日に野に出て草花びなを作り、料理を食べる風習を今でも伝えている地域もある。

『水室』2019年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(五一) 三夏

尾池和夫

【山椒魚(さんせううを)】 はんざき

サンショウウオ目の両生類の総称である。蜥蜴のような姿で小川の源流近くなど、水の湧き出るあたりや溪流に棲息している。小魚、蟹、蛙などを捕食する。名の由来は、山椒に似た匂いがあることによる。

「はんざき」は大山椒魚の異名である。日本にいる多くのサンショウウオの中で一メートルを超えるまでに成長するのはオオサンショウウオだけで、世界最大の両棲類である。他のサンショウウオが成長して陸に上がると違って、オオサンショウウオは一生を水中で暮らす。昔の形を残しているので「生きた化石」と呼ばれている。国の特別天然記念物に指定されており、観察して詠むだけにすることが基本である。京都の鴨川には、台風の増水で流されてきたオオサンショウウオが土手で見つかることがある。

オキサンショウウオというのが隠岐島後だけに生息している。体長一センチほどで小さい。やはり幼生は水性で島後の溪流にいる。成長すると陸で生活する。産卵期以外は陸の倒木の下や石の下にいる。遺伝子から、溪流に棲むタイプが池に棲むタイプに進化し、また溪流の環境に棲むようになったという逆戻り進化をしたことがわかっており、世界的に珍しい生物であり、大山隠岐国立公園は「世界の希少種最後の生息地」のリストに掲載されている。

【烏賊】 真烏賊、やり烏賊、するめ烏賊、烏賊の墨、烏賊の甲

コウイカ目とツツイカ目に含まれる軟体動物頭足綱の総称。さまざまな大きさのものが生息し、胴長数センチのヒメイカから全長約二〇メートルになるダイオウイカまで知られている。八本の腕と二本の触腕を持ち、胴には鰭がある。全世界の浅い海から深海まで、あらゆる海に分布する。

小魚、甲殻類を主食とし、天敵は鯖などの大型魚、鳥、海生哺乳類で、襲われた時には漏斗から水を噴出する。噴射で空中に飛び、腕と鰭で滑空するものもある。墨を吐き出して敵の目をくらませるが、紡錘形にまとまって大きく広がる。体と似た形で敵を引きつけておいて逃げる。

烏賊は、神経系や筋肉が発達しており、たいていの種類は夜行動する。漏斗からの噴水と外套膜の収縮と鰭を使って、前後に自在に泳ぐ。

体内に殻を持つ。軟甲のものと石灰質の船形の甲を持つものがある。皮膚に色素細胞が多く、環境で自在に変化させる。烏賊は心臓と、他に二つの鰓心臓を持ち血液を急送する働きを担っている。浮力を得るために比重の重い液体を体液に含む。ダイオウイカなどは、浮力のために塩化アンモニウムを持っており臭くて食用に適さない。

『氷室』2019年6月号掲載用

季語つれづれ 番外(五三) 三夏

尾池和夫

【章魚】 蛸、蛸壺

頭足類の軟体動物で、蛸壺漁が有名だが、豚の脂身で釣ることもある。種類が豊富で刺身、酢の物などにして食す。飯蛸は、マダコ科の蛸で春の季語である。

複数の吸盤がついた八本の触腕を持つ。一般には足と呼ばれる。英語では腕(arm)と呼ぶ。

見た目で頭に見える丸く大きな部位は、実際には胴部であり、頭は触腕の基部に位置して、眼や口が集まっている。つまり頭から足が生えているのである。烏賊も同じ構造で、「頭足類」と呼ばれる。

柔軟な体は筋肉で、強い力を発揮する。体で固いの眼球の間の脳を包む軟骨と嘴のみである。そのため狭い空間を通り抜けることができ、水族館で飼育する場合の逃走対策が重要である。

危険を感じると黒い墨を吐いて姿をくらます。捕らえられた触腕を切り離して逃げるができるが、触腕は再生する。そのとき分かれて生えることもあり、極端なものでは、日本で九六本足の蛸が見つかり、志摩マリンランドに展示されている。

蛸は高い知能を持つ。形を認識し、問題を学習して解決することができる。密閉されたねじ式のガラス瓶の餌を視覚で認識し、蓋を開けて餌を取る。

『氷室』2019年6月号掲載用

季語つれづれ 番外(五四) 三夏

尾池和夫

【蟹】 山蟹 沢蟹 川蟹 磯蟹 小蟹 蟹の穴 ざり蟹

甲殻類の節足動物の総称で、夏の季語の蟹は、水辺にいる小蟹のことを指している。

沢蟹は料理の涼感の演出にも活躍し、唐揚げにする。これに対して、ずわい蟹は三冬の季語であり、明確に区別される。

蟹は、熱帯から極地まで世界中の海にいる。さまざまな種類があり、成体の大きさも数ミリから、脚の両端まで三メートルを超えるタカアシガニまでと変化に富んでいる。頭胸部に五対の歩脚（胸脚）を持ち、最前端的の一対が鉗脚（かんきやく）、つまり鉗である。短い触角が二対ある。食用で多いタラバガニやヤシガニなどは第五歩脚が甲羅内の鰓室に折り畳まれている。

鉗脚は、餌を掴んだり敵を威嚇したりするのに用いる。シオマネキのオスの片方の鉗は巨大化しており、この大きな鉗は求愛行動のみに使い、採食にはもう一方の小さな鉗の方を用いる。

蟹の多くは横歩きするが、ミナミコメツキガニは前歩き、アサヒガニ科やカラツパ科のカニは後ろ歩きをする。クモガニ科とコブシガニ科のカニは七個の節からできている脚の各節が管状で、前後左右へ自由自在に動くことができる。呼吸は頭胸甲の両側にある鰓で行うから水が不可欠である。水揚げされた蟹は、限られた水を繰り返し使って泡を吹く。

『氷室』2019年7月号掲載用

季語つれづれ 番外(五五) 晩夏

尾池和夫

【氷室】 氷室守、氷室の山、氷室の雪

天然氷を室に入れて夏まで貯蔵するための洞穴で、氷室守はそれを守る人である。古くは『日本書紀』に記述が見られ、氷連(むらじ)という姓(かばね)が登場している。各地の氷室から宮中に氷が献上されたが、それを復活して行事とする地域も現存する。金沢市では七月一日に氷を模した氷室饅頭を食べて健康を祈る。氷室開きが一九八六年に復活し現在も続いている。

氷室の桜という晩夏の季語もある。氷室の花とも詠まれ、氷室のある近くに夏に咲く桜をいう。春の花を氷室に入れて保存しておくことという解釈もある。

氷室があった場所に地名が残っている。京都市北区西賀茂氷室町、出雲市斐川町神氷氷室など各地にある。

英語ではアイスハウスで、イギリス、アメリカ合衆国、イタリア、ペルシアなどで確認されている。

穴と藁だけのものから本格的な貯蔵庫まで、冷蔵庫が利用されるまでの一般的施設だった。季語の生まれた日本列島には、中緯度の豪雪地帯があり、熱エネルギーの利形態として可能性を持っている方式で、北海道穂別町、沼田町などで天然雪による冷熱利用の倉庫があり、米、ブロッコリー、ナガイモなどが保管されている。野菜は氷室で長期保存すると甘みが増す。米は「雪瑞穂」の名で売られている。

『氷室』2019年8月号掲載用

季語つれづれ 番外(五六)三夏

尾池和夫

【雨蛙】 枝蛙 青蛙 夏蛙

アマガエル科の種で体長二・五センチから四センチほどである。木の葉や草の上に棲んでいる。目の後ろに黒線があり、体の色は木の葉にとまると緑色、木の幹や地上にいる茶色というように変化する。木の枝にとまることもあつて枝蛙とも呼ばれる。

英語では「Japanese tree frog」といふ。

雨という字が付いているので水にいと連想する人がいるが、平地から低い山地に棲み、繁殖期にだけ水辺に来る。水田などから生まれたときには、群で上陸し、あぜ道を横切ることもある。小さいから踏まないようにしなければならぬ。

日本雨蛙は日本の他、朝鮮半島、中国の東北部に広く分布している。日本雨蛙の寿命は飼育下で五年、野生で数年という。気温が下がると冬眠する。

蟄の毒はブフォトキシンで犬が泡を吹いて倒れたという報告があるが、雨蛙も「ヒストンH4」というタンパク質の毒を持っており、それによって皮膚を細菌などから守るために分泌する。微生物の細胞膜を溶かす作用があるので、手に傷のある人が雨蛙に触ったらすぐに手をよく洗った方がいい。

雨蛙の皮膚は湿度や気圧に敏感で、夕立が迫ったり、雨模様になると繁殖期でなくても鳴く。その泣き声は「レインコール」と言われる。冬眠から覚めたときや晩秋には雨に無関係に鳴く。鳴くのは雄である。



『氷室』2019年8月号掲載用

季語つれづれ 番外(五七) 晩夏

尾池和夫

【仙人掌の花】 霸王樹 月下美人 女王花

仙人掌はサボテン科の多年生植物で、盛夏に花を付ける。南北アメリカの原産で、葉は刺状に変化しており水の蒸発を防ぐ。茎は深緑色で、扁平、円柱、楕円などの形で、観賞用にも多用されている。

伊東市に伊豆シャボテン公園があるように、シャボン(石鹼)として使ったのでサボテンの名が付いたといわれる。

サボテンの種子繁殖は、よく試みられるが、自家不和合性の種類が多く、同種別個体の花粉を授粉する必要がある。挿し木はクローンであるから有性生殖ができない。

紐サボテン属のドラゴンフルーツやウチワサボテン属のトウナは一般的な果物である。ウチワサボテンの若い茎節(ノパール)は、メキシコ料理では野菜の扱いである。ミネラル、繊維質、ビタミンを含み、大切な栄養源である。傷の手当、熱さまし、肥満、糖尿病、二日酔い、便秘、日焼けによるシミの予防などの民間薬となっている。サボテンの棘を抜いて焼いたサボテンステーキもある。

月下美人は、メキシコの熱帯雨林地帯原産地で、サボテン科クジャクサボテン属の常緑多肉植物である。夜、白い花が数時間だけ咲き、濃厚な香りがある。一夜明けると、月下美人の花を洗い、熱湯を注いでしばらく置く。適当な大きさに切って酔の物にすると、とろみがあつてたいへん美味しい。

『氷室』2019年9月号掲載用

季語つれづれ 番外(五八) 初秋

尾池和夫

【葡萄】 デラウェア マスカット 巨峰 ピオーネ 甲斐路 葡萄園 葡萄棚  
葡萄狩

ブドウ科の蔓性落葉低木の実のことで、古くから食用とされ、棚から実の房が垂れるように仕立てる。種類は多岐にわたり、粒の色は、紫、緑、黒が主で、色も大きさもさまざまである。ワイン用に栽培されている種類も多い。

穂状の花をつける。野生種では雌雄異株、栽培種では一つの花に雄蕊と雌蕊があって自家受粉する。つまり自家結実性があり一本で実をつける。葡萄園でいくつかの種類の葡萄が近くに下がっていることがあり、葡萄狩りなどの行事ではその点が楽しい話題になる。

ぶら下がった房の、枝に近い部分から熟していくので、房の上の方が甘みが強く、下の方は甘味が弱い。甘味成分はブドウ糖と果糖で、ほぼ等量含まれる。酸味成分は酒石酸とリンゴ酸で、やはりほぼ等量含まれている。紫の皮には、アントシアニンが多い。

紀元前三千年ごろ、コーカサス地方やカスピ海沿岸でヨーロッパ葡萄の栽培が始まり、紀元前二世紀には中国に伝わった。日本の甲州種は、中国から輸入された東アジア系ヨーロッパ葡萄が自生化したのが発見され、鎌倉時代初期に甲斐国勝沼（現在の甲州市）で栽培が始められたものである。山葡萄は古くから日本に自生していたもので別種である。

『氷室』2019年9月号掲載用

季語つれづれ 番外(五九) 仲秋

尾池和夫

### 【山葡萄】 野葡萄

山地に生えるブドウ科の落葉蔓性木本である山葡萄の実で、直径八ミリほどの球形の液果が房状に垂れる。十月ごろには黒く熟して、食べられるが酸味が強い。果実酒やジュースに加工されて人気が出始めている。蔓は葉に対生する巻き髭で、他の植物などに巻き付いて高く登る。葉は互生で一〇センチから三〇センチ、柄元に凹みがある。裏には茶褐色の毛がある。

野葡萄は、紫、碧、白色などに熟して美しいが、こちらは食用にはならない。

山葡萄は冷涼地に自生する野生種で、サハリン、南千島、北海道、本州、四国、鬱陵島に分布する。雌雄異株で、果実は雌株だけに着く。野生で自生しているものを収穫していたが、最近は栽培する地域が出始めている。栽培するためには雌木と雄木を混植する。ワインの原料として注目され、品種改良も試みられている。北海道十勝の池田町では、山葡萄の「十勝アイヌ山葡萄酒」を醸造し、一九六四年に第四回国際ワインコンペティションで銀賞を受賞した。一般の葡萄と比べると鉄分は五倍、カルシウムが四倍などの特徴があり、特にポリフェノールが三倍含まれている。

山葡萄の蔓は丈夫で、籠をはじめとして多く使用されており、北海道のアイヌは樹皮で草履を作る。

『氷室』2019年10月号掲載用

季語つれづれ 番外(六〇) 仲秋

尾池和夫

### 【野葡萄】 蛇葡萄

ブドウ科の落葉蔓性低木で、山野に自生するほか、道端の生垣などに絡まっている。夏から初秋に淡黄緑色の小さな花を咲かせる。北海道から沖縄の山野によく見られる。日本全国のほか、東アジア一帯に分布し、アメリカ大陸にも帰化している。

秋に実を結ぶが、熟すと光沢のある白や紫や青や緑と、色とりどりになって美しい。白い実が本来の実であり、その他の青や紫などの実は、虫が寄生して寄生果となった色である。美しいが、山葡萄と異なり不味くて食用にはならない。利用価値が無いので「犬葡萄」と呼ばれる。また「馬葡萄」とも呼ばれるが、これは馬の関節炎などの治療に湿布薬として用いられていたことが元で、今でも馬の治療に利用される。

蔓性で葉の形が多様であるのが大きな特徴である。葉は山葡萄や葡萄に似ることもあるが別属である。果実が葉と交互につくという特徴が葡萄とはまったく異なっている。

果実を觀賞するために園芸植物として栽培される。また、漢方では、ノブドウ属の植物を「蛇葡萄」（じゃほとう）、「蛇葡萄根」（じゃほとうこん）として利用する。さらに、果実の焼酎漬けの「野ぶどう酒」、乾燥させた葉を飲料にする「野ぶどう茶」も販売されており、民間伝承としては肝臓病や白血病の特効薬と信じる人も居るとい

う。

『氷室』2019年10月号掲載用

季語つれづれ 番外(六一) 仲秋

尾池和夫

【夜庭】 朝庭 大庭 小庭 庭揚げ

夜庭は、夜に粃を摺ることを指す。朝に摺る場合は「朝庭」と言う。磨り臼や唐箕で粃殻を除く作業が粃摺である。粃摺の作業は機械化して、夜庭という季語は絶滅危惧種になっている。長野県上田市に住む矢島渚男は、〈夜庭とふつましき季語も失せにけり〉と詠んだ。

夜庭には、秋の夜長を利用する知恵という面もあるが、昼の間、日の出から日の入りまでを田んぼで労働して、さらに粃摺を夜の仕事とするという、たいへんな重労働を表現する季語でもある。重労働を癒やすために夜庭唄が生まれた。宇多喜代子著『古季語と遊ぶ』には、「労働歌でもある夜庭唄は、卑猥で笑いを含んだ内容のものも多いが、あつけらかんとしていて、いかにも彼らの元気の源になった」とある。

宇多喜代子は『里山歳時記 田んぼのまわりで』の「藁と粃殻」の中で、「稲架、稲抜き、粃、粃摺、藁塚、今年藁、これらの季語は実体も実感もない季語ということになって歳時記から消されてしまい：」という将来を予測した。しかし、その中でさらに「穀物や野菜や果物などの実りは、日や月、風雨などの自然の力なくしては望めないということです」と結んでいる。

「よなべ」と「夜庭」は秋の季語であるが、「藁仕事」は冬の季語で、室内で藁で筵を編んだりする仕事である。

『氷室』2019年1月号掲載用

季語つれづれ 番外(六二) 晩秋

尾池和夫

### 【九月尽】

旧暦九月の晦日をいう。秋が尽きるといふ感慨が強くこもっており、秋を惜しむ情の深いことばである。古くから三月尽と九月尽とが対のように用いられてきたのは、春と秋には心にしみる景物が多く、それらを惜しむ気持ちの現れである。現在では新暦九月の終わりの意で使われることがあるが、そういう季語の使い方は推奨しない。二〇一九年では小の月で旧暦九月二十九日は西暦の一〇月二十七日であった。

季語としては九月尽のほか、二月尽、三月尽、弥生尽が見られる。弥生尽の傍題に四月尽と詠む場合も散見するが、旧暦の月に一を加えて季語にするという安易な考え方は混乱を招く。太陽の運行に基づく暦と月の運行に基づく暦を単純に換算することとは自然に反している。

「尽」が二音なので、二月、四月、五月、九月の三音とつなぐと語呂がいい。講談社の『大歳時記』には、二月尽、三月尽、四月尽、五月尽、七月尽、八月尽、九月尽が載っている。『角川大歳時記』では、二月尽、三月尽、四月尽、七月尽、九月尽が載っている。月の最後の日が季節の変化を劇的に感じさせることがなければ、月の名の後に尽を付ける季語というのは意味がない。「二月尽」しか、あるいは「九月尽」しか、季語として使わないという俳人もいる。そのようなことを十分に踏まえた上で詠むことが大切である。

【生姜掘る】

新生姜は晩夏の、生姜は三秋の季語であるが、「生姜掘る」は初冬の風物である。生姜はインド原産とされる多年草である。暖地でまれに花をつけるが結実はない。茎の根元の基部の地下茎が肥大したものを香辛料あるいは生薬に用いる。

秋の新生姜は繊維が柔らかく特に好まれる。酢に漬けたり生で利用したり、ジンジャーエールや蜂蜜漬にしたり、さまざまな形で味わう。新生姜は水分が多く辛みも弱いので、子どもでも食べやすい。薄切や千切で風味をしつかり味わうのに向いている。千切でサラダ風に和えると夏野菜との相性がよい。一年中手に入る茶色い生姜は、古根生姜（ひねしょうが）、困い生姜などと呼ばれる。古根生姜は新生姜を二か月程度貯蔵したもので、繊維質が増えて辛みが強くなる。

生姜に含まれる重要成分は、ジンゲロール、ショウガオール、ジンゲロン、精油である。ジンゲロールは生の生姜に多い辛味成分で、免疫細胞を活性化して老化を防ぐが、酸化しやすく空気に触れて三分後には消滅する。また加熱や乾燥をすると別の成分に変わる。ジンゲロールを摂取するためには食べる直前に摺りおろす。

ショウガオールは乾燥や加熱で生成され、体を温める効果がある。冷え性の改善には、生ではなく加熱や乾燥生姜が効果的である。ただし、摂氏100度を超えると破壊される。

『氷室』2019年12月号掲載用

季語つれづれ 番外(六四) 三冬

尾池和夫

【ずわい蟹】松葉蟹 越前蟹

ずわい蟹は、クモガニ科の蟹である。山陰や京都では松葉蟹、福井県では越前蟹、石川県では加能蟹ともいう。日本海、ベーリング海などに分布する蟹で、丈夫で長い脚を持っている。雄の方が雌よりはるかに大きい。食用に供されるのは冬で、高値で珍重されている。雌は「コツペ」「せいこ」「香箱(こうばこ、こうばく)」などと呼ばれる。

ずわい蟹漁の解禁日は十一月六日である。この日の深夜〇時に網を入れ、漁をスタートさせる。籠漁でなく底引き網で獲るので引き揚げたらすぐに運ぶことができる。六日の初日だけは昼に初競りが行われる。漁の終わりは、雌が一月二十九日、雄が三月二〇日である。

但馬地域で松葉蟹の選別日本一の柴山港は、年間を通して海産物に恵まれるが、とくに松葉蟹漁が解禁されると町中が活気づく。香住では水揚げされた蟹を、大きさ、重さ、色、形などで八〇から一〇〇のランクに分ける。船主の家族(主に女性)が選別し競りにかける。その細やかな選別が香住蟹を支える。

日本海沿岸の森の栄養が流れ込み、対馬海流が流れ、それに海底の環境が重なる。対馬海流は浅い部分の流れ、深層部に影響しないために、日本海固有水は深度が深くても溶存酸素量が表層水とほとんど変わらない。その環境が奇跡の漁場とよばれる海を作っている。



『水室』2019年12月号掲載用

季語つれづれ 番外(六五) 三冬

尾池和夫

【鱻】 雪魚 真鱻 助宗鱻 鱻場 子持鱻

タラ科の魚の総称あるいは真鱻のことをいう。真鱻は日本海から北日本の太平洋岸に分布し、助宗鱻(介党鱻)は北太平洋に分布する。いずれも寒流の魚である。海底近くで生活する底生魚で、水深二〇〇メートル以深で暮らす深海魚が多い。背中側の色が灰色や褐色で、水底に紛れる保護色である。大きな群れをなし、大規模に回遊するものもある。

冬期から早春にかけて産卵する。卵は沈性卵で砂泥の海底に産卵する。一度の産卵数は数十万から数百個に及び、魚類の中でも多産である。親魚による卵や仔魚の保護がなく、生残率は非常に低い。鱻が非常に貪欲であるので、「たらふく(鱻腹)」の語源となったとも言われている。

鱻は重要な水産資源である。底引き網、延縄、釣りなどで漁獲される。身は、鱻ちりなどの鍋料理、棒鱻などの干物、フィッシュアンドチップスのような揚げ物、バラオなどの塩蔵品、かまぼこや魚肉ソーセージに利用される。また肝油を採取し、スケトウダラの卵巣は「たらこ」、内臓を唐辛子漬けにして塩辛にした韓国の「チャンジャ」など、よく使われる食材である。

身が雪のように白いで「鱻」と書くが、これは国字である。日本では古くから「大口魚」と呼ばれていた。鱻という国字は今では中国でも一般的に用いられている。

【鷹】 のすり 八角鷹 熊鷹 鶚 青鷹 蒼鷹 もろがへり 大鷹

鷹は、ワシ、タカ科の中形の鳥類の総称で、暗褐色、嘴は強く鋭く曲がる。脚の強い大きな鉤爪で動物を捕らえる。鷹狩に使われている鷹は、主として大鷹である。蒼鷹（もろがへり）は、生後三年を経た鷹のことをいう。

この中で、鶚（みさご）について少し詳しく述べる。魚を捕食することから「魚鷹」という異名がある。

鶚は極地を除くほぼ全世界に分布する。ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の亜寒帯から温帯地域とオーストラリアの沿岸部で繁殖し、北方の個体はアフリカ大陸中部以南と南アメリカに渡って越冬する。日本では留鳥として全国に分布する。北日本では冬季に少なく、南西諸島では夏に少ない。西日本では冬季普通に見られる鳥だったが、近年やや数が減少した。

全長六〇センチほどで、翼を拡げて一五〇センチ以上となる。雄雌ほぼ同じ色で、背中と翼が黒褐色、腹部と翼の下は白色、顔も白、眼を通って首に達する太い黒褐色の線が走る。頭部に小さな冠羽があり、嘴は黒く、脚は青灰色。

和名の由来は水を探るが転じたという説がある。獲物を捕らえる時の水音に由来するという説もある。水面に突入する音から「ビシヤ」、「ビシヤゴ」と呼ぶ地域がある。

垂直離着陸機の「オスプレイ (Osprey)」はミサゴを意味しているが、鳥の鶚は事故を起こすことはない。

『氷室』2020年1月号掲載用

季語つれづれ 番外(六七) 三冬

尾池和夫

【鷲】 犬鷲 尾白鷲 大鷲

鷲とは、タカ目タカ科に属する鳥のうち比較的大き目のものを指す通称である。タカ科の比較的大きいものを鷲、小さめのものを鷹と呼んで、明確な区別はない。日本には、犬鷲、大鷲、尾白鷲の三種類が生息している。人には害を加えず、生きている鳥や、獣、魚を餌とする。鷲は鳥の中で最も体が大きく勇猛である。

鷲の尾羽は矢羽根として最高のものとされ、陸奥国の名産として朝廷や伊勢神宮の遷宮の折などに、鷲の尾羽を献上したという記録が残っている。

柿川鮎子さんによると、鷲と鷹の究極の見分け方のポイントは三つで、まず、鷹は尾が扇状に広がっているものが多く、鷲の尾は直線状で外側には広がっていない。二つ目は、鷹には独特の鷹斑と呼ばれる模様があり、鷲にはない。三つめは、鷲は羽ばたいて飛ぶように見え、鷹はめったに羽ばたかずに気流に乗って飛ぶ。

大きさでは、大鷲の雄は全長八八センチ、雌一〇〇センチ、翼開長は二〇〇から二五〇センチ程度であり、大鷹の雄の全長五〇センチ、雌の全長六〇センチ、翼開長は一〇〇から一三〇センチである。

さらに鷲と鷹の他に、鳶や隼という猛禽類がいて、大きさの順に並べると、鷲、鳶、鷹、隼となるが、鳶は雀と同じように鳥の名だけでは季語にならない。

『氷室』2020年2月号掲載用

季語つれづれ 番外(六八) 晩冬

尾池和夫

【雪】 六花(むつのはな) 小雪(こゆき) 大雪(おほゆき) 深雪 粉雪 粉

雪 細雪 小米雪 新雪 根雪 飛雪 雪明り 暮雪 雪晴 深雪晴

中緯度の豪雪地帯を持つ日本列島にとって、雪は代表的な季語で、古来「雪月花」の一つとされている。日本海の暖流から蒸発した水が大陸からの風で、北海道、北陸、東北の日本海側に有数の多雪地帯を産み出す。雪に閉じ込められ被害が大きい半面、水資源として重要である。

雪は大気中の水蒸気から生まれる。水蒸気が冷えて結晶となり空から地上に降る。雪が降る天気を雪と呼び、降り積もったものを雪と呼ぶ。それぞれを雪片、降雪、積雪と区別する。固体の形態での降水は、雪の他にも霰、雹、凍雨、細氷があり、雨と混在すると霰という。雪と細氷は氷の結晶、霰、雹、凍雨は氷の粒である。前者は規則性のある結晶構造で空気を含むから密度が低く浮遊する。後者は密度が高く落下してくる。細氷は地表付近で水蒸気が昇華して生成されるので非常に小さく、直径が三〇ないし二〇〇マイクロメートルである。

太宰治『津軽』の冒頭には、津軽の七つの雪が紹介され、演歌にも出てくるが、定義が明確ではなく、天気予報などには使われていない。

動詞の「雪ぐ(すすぐ)」は祓い清める意味で「雪辱」という単語はハンゲルでも

「雪辱(설욕)」であり、中国語の「雪耻」も同じ意味である。

『氷室』2020年2月号掲載用

季語つれづれ 番外(六九) 晩冬

尾池和夫

【雪女郎ゆきちよらう】 雪女

傍題として雪坊主、雪の精もある。小泉八雲が『怪談(Kwaidan)』の中で雪女を紹介した。武蔵国の百姓の話である。茂作と巳之吉が吹雪で帰れなくなって小屋で寝た。巳之吉が目を覚ますと、長い黒髪の美女が茂作に白い息を吹きかけ、茂作は凍りついて死んだ。巳之吉を見た女は「お前は若く美しいから助けるが話したら命はない」と去った。数年後、巳之吉は美女お雪に出逢い十人の子が生まれた。ある日巳之吉が「あの日、お前にそっくりな女に出逢ったが、雪女だったのか」と話してしまった。子どもが哀れで殺さないと去ったお雪の姿を、その後見た者はなかった。

二〇〇二年、秋川街道が多摩川をまたぐ調布橋のたもとに「雪おんな縁の地」の碑が立てられた。江戸時代は気温が低く、多摩地域にも大雪が降ることがあった。

地方では雪娘、雪おなご、雪おんば、雪んばなどの呼び方もある。正体は雪の精、雪の中で行き倒れた女の霊などの伝承がある。山形県小国地方の話では、元は月世界の姫で、退屈な生活から抜け出すために雪と一緒に降りてきたが、月へ帰れなくなったため、雪の降る月夜に現れる。

元旦に雪女が来て帰る弘前の伝承、小正月や冬の満月の日に雪女が多くの子を連れて遊ぶという遠野の伝承などに、歳神の姿を見ることが出来る。吹雪の晩に雪女を親切にもてなすと翌朝、黄金と化していたという昔話もある。

『ゲゲゲの鬼太郎』には、ねこ娘の友人として登場する。

『氷室』2020年3月号掲載用

季語つれづれ 番外(七〇) 仲春 天文 尾池和夫

【比良八荒】 比良の八荒 八講の荒れ

かつて比良山中各地で行われた法華八講を比良八講という。一説には近江の比良明神(白鬚神社)ゆかりの寺で旧暦二月二十四日に行われていたともいわれているがすでに絶えて久しかった。一九五五年、比良八講の法要が箱崎文応大僧正によって再興された。以来毎年三月二六日、天台宗の僧侶によって、打見山で取水した水を湖上に注ぎ、水難者の祈祷ののち、近江舞子で採燈護摩供が行われる。

この行事の会場は、八屋戸から浜大津、雄琴、唐崎、堅田へと変遷してきて、二十世紀になってからは由来通りに、比良山の麓である近江舞子の雄松崎で執り行われている。南小松の子どもたちが野村太鼓を演奏して比良八講衆を迎え入れる。

この比良八講の前後に寒さがぶり返し、比良山地から強風が吹き下ろして、琵琶湖が荒れることが多い。その強風を比良八荒という。丹波山地から比良山系の急斜面を琵琶湖に向けて吹き下ろす北西の風で、比良おろしという。気圧配置と明瞭な関係があつて、等圧線が北東から南西へ走るような気圧配置のときに発生する。強く吹くと、比良山地の尾根に風枕という雲が出る。

JR湖西線が比良山系の東の麓にあり全線が高架で真横からの風を受ける。一九九七年には比良駅に停車中の貨物列車が横転し、最大瞬間風速五七メートル以上と推定された。一九四一年四月六日、死者一名を出した旧制第四高等学校漕艇部員の遭難が「琵琶湖哀歌」で知られている。

『氷室』2020年3月号掲載用

季語つれづれ 番外(七一) 仲春 地理 尾池和夫

### 【雪崩】

山岳地帯の積雪が気候の変化でゆるみ、山上や山腹から崩れ落ちる現象である。轟然たる響きが発生する。家を埋めたり人命を奪うこともある。残雪、雪解などの季語が関連する。

雪崩の発生条件はさまざまである。降り積もった雪粒同士の結合が、重力、圧力、気温の上昇などの環境変化によって壊された際に発生する。気象庁が、雪崩の発生する危険な状態に対して雪崩注意報を発表する。注意報は発令されるが警報はない。

急激な気温の変化が積雪内に大きな温度差を生じさせ、「しもぢらめ雪」と呼ばれている弱い層が形成される。また、一度に大量の降雪があると、弱い層の上に積もる雪に荷重が増す。急斜面で弱い層が支持力を失い、雪崩が発生する。規模の大きな雪崩は、三五度から四五度の急斜面で発生する。樹林帯で一部樹木のない斜面では雪崩が頻繁に起こっていることが多い。雪庇や広大な斜面、沢筋などでも発生確率が高い。

雪崩多発地帯ではU字谷に似た地形ができる。これをアバランチシュートと呼ぶ。

大規模な雪崩の被害の中で、一九一八(大正七)年一月九日、新潟県南魚沼郡三俣村(現在の同郡湯沢町)で泡雪崩が発生し、集落が襲われて一五八名の死者を出したのが日本で最大の雪崩被害(三俣の大雪崩)である。

『氷室』2020年4月号掲載用

季語つれづれ 番外(七二) 三春 天文

【陽炎】 糸遊 遊糸 野馬(かげろふ) 野馬(やば) かぎろひ

強い風がなく日差しが強い日、地上に沿って遠くを見たとき、遠くにあるものがゆらゆらと揺らぐように見える現象を言う。春になって現れ始めることから春の季語とされているが、年間の頻度から見ると夏に多く見られる気象現象である。道路が舗装されたために現代では見る機会が増えている。

通常は直進する光が、異なる密度の空気がある場所では、密度の高い方へ屈折して進む。観測の対象となる景色や物体と観測者との間に、異なる密度の空気が隣り合っている場所がある場合、そこを通過する光は直進とは異なる経路をたどるために、景色や物体が通常とは異なる見え方をする。光学では、このような原理で揺らぎができることを「シュリーレン現象」と呼ぶ。

大気では温度変化で空気の密度が変わり、温度の異なる大気が隣り合っている場合、光は冷たい空気の方へ曲がる。風が弱いと滞留している大気が暖まり、密度が小さくなって上昇し、周りの冷たい大気と混ざって、乱流的な上昇気流が発生する。この部分を通る光が屈折されて陽炎が見える。

逃げ水は地鏡とも言われ、路面などで遠くに水があるように見える現象であり、蜃気楼は水上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見えたりする現象である。



『氷室』2020年4月号掲載用

季語つれづれ 番外(七三) 三春 天文

【春雷】春の雷 初雷 虫出しの雷 虫出し

春に鳴る雷は、夏の雷と違って一つか二つ鳴って止むことが多い。冬の終わりを告げるように、立春の後、初めて鳴る雷のことを初雷と呼ぶ。啓蟄のころは大気が不安定でよく雷が鳴るので、虫出しの雷とか虫出しとも言われる。春の雷には、積乱雲の起こす夏の雷の烈しさにはない優しさがある。

活動の活発な寒冷前線の通過時に発生する界雷である。界雷というのは、低気圧に伴う寒冷前線や梅雨前線の近くで発生する雷である。前線雷とも呼ばれる。熱雷が日射による下層からの加熱によって発生するのに対して、界雷は大気の成層の不安定化で発生する。寒冷前線に沿って発生する界雷は激しい。寒冷前線に伴う雲の中で発生し、地上付近の気温が低いため、雷雨には雹を伴うことがあり、農作物に被害がある。

春の雷という語感が誤解を生むが、春雷の威力を侮ってはいけない。例えば、二〇〇六年四月二日、西日本全域に発生した雷雲で、奈良市では直径五ミリの雹が降り、三重県上空では飛行機のエンジンが被雷して大阪空港に緊急着陸し、高知空港では飛行機の機首に被雷してプロペラが停止し、名古屋空港でも飛行機が引き返した。

飛んでいる飛行機には下からの雷を受けるので落雷ではなく被雷と言う。このように春雷は少ないが、大電の荷量、正極性の落雷が多いので危険を伴う。

『氷室』2020年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(七四) 三夏 時候

【短夜】 明易し 明易

夏は夜が短く、暑さで寝苦しいのでたちまち朝になる。明けやすい夜を惜しむ心は、ことに後朝の歌として古来詠まれてきた。

夜の時間の長さは、太陽と地球との位置関係で季節によって変化する。夜が最も短いのは、北半球では六月二二日頃、つまり夏至である。

二〇二〇年の夏至は六月二一日で、この日の日の出は、札幌で三時五五分、鹿児島では五時一三分、日の入りは札幌で一九時一七分、鹿児島では一九時二六分である。この日の日照時間は札幌で一五時間二二分、鹿児島では一四時間一三分である。夜の時間が札幌で八時間三八分、鹿児島でも九時間四七分であって、夜が短いことがわかる。

夏至の夜の短かさ、はかなさを惜しむ気持ちで夏の夜を呼んだのが「短夜」という季語であり、対して春の「日永」、秋の「夜長」、冬の「短日」がある。いずれも物理的な時間の長短よりも、季節を背景にした情感を主とした言葉である。

『枕草子』では、「夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍おほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし」とある。

かつて、夜は一日のはじまりであった。日没から一日が始まった。「あした」は翌日ではなく「朝、夜明け」であった。日没から翌朝までが一連の時間と意識されていた。夜は百鬼夜行、神々の時間であった。その時間が過ぎて人の時間がやってきた。短夜には、日本人が体験した夜のさまざまな記憶がうち重なっている。

『氷室』2020年5月号掲載用

季語つれづれ 番外(七五) 三夏 天文

【夏の霧】 夏霧 海霧 海霧

霧は秋の季語だが、山地や海辺では夏にも発生する。海霧は太平洋上を南寄りの風に乗ってきた暖かく湿った空気が、親潮寒流の上で冷やされ発生する濃霧である。

北海道や千島列島を含む北部北太平洋で、夏になると霧が発生しやすくなる。北太平洋高気圧から吹き出す温暖湿潤な空気が、寒冷な親潮の影響を受けて海霧を生じさせる。また、人工物質を含めた陸からの空中の微粒子が霧を発生させやすくする要因のひとつとなる。内陸部の背後に山地がある釧根地方で、流れ込んだ海霧が滞留しやすく、日照期間が少ない冷涼な気候になる。

北海道沿岸、特に釧路などでは、こうした海霧を「じり」と称し、「霧と霧雨の間」と言われる。釧路は太平洋側にある。北海道も中央部に日高山脈などの山脈があり、冬場の気候は日本海側の曇天とは異なって晴天となる。釧路の冬場の日照率は高い。一方、夏場は湿潤で暖かな南東季節風が優位となり、釧路の沿岸部を流れる親潮によって冷やされ、釧路沖で霧となる。その霧が南東季節風によって陸地まで移動してくる。陸地で発生する霧と異なるから海霧(かいむ)と呼ばれる。沖合から陸地に移動してくることから移動霧(きり)とも呼ばれる。

内陸の盆地で発生する霧は放射霧で、日照で解消されるが、海霧は沖合から継続的に移動し、大量に供給されるので日照によって解消されることはない。

「霧の摩周湖」と言われる霧も、太平洋沖で発生した霧が内陸八〇キロまで侵入し、摩周湖の外輪山を乗り越えて湖の低いところに流れ込む現象であり、摩周湖の霧も海霧である。